

I 3 学年の授業実践

第3 学年 体育科学習指導案

令和元年 10 月 25 日（金）第 5 校時

男子 13 名 女子 12 名 計 25 名

活動場所 鉄棒

指 導 者 播磨 栄治

岡崎 隆太

1. 単元名 くるくるくるりん十津忍者！～てつぼうの巻～（鉄棒運動）【器械運動】

2. 単元について

○教材観

中学年の鉄棒運動は、回転したり、支持したり、逆位になったり、懸垂したりすることなどの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びに触れることのできる運動である。低学年での器械・器具を使った運動遊びの学習を踏まえ、中学年では、鉄棒運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、支持系の基本的な技を身に付けるようにし、高学年の鉄棒運動の学習につなげていくことが求められる。また、運動を楽しく行うために自己の課題を見付け、その解決のための活動を工夫するとともに、きまりを守り誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりすることなどができるようにすることが大切である。

○児童観

〈態度・意識面事前アンケート〉

項目	全体評価	評点
楽しむ	14.6	5
わかる	13.6	5
できる	13.9	5
まもる	14.9	5
合計	57	5

本学級の児童は、男子 13 名 女子 12 名 計 25 名である。年度当初の体育授業についての診断的授業評価結果から 4 観点の評価は高い傾向にあるが、その中でも「わかる」についての評価が低く、どうしたら運動ができるか考えながら学習に取り組むことは十分でない。

鉄棒運動系の学習については、2 年生の時に、児童が「忍者」となり、固定施設・鉄棒の「忍法（動き）」を習得するために「修行」に出掛けるというストーリー設定で運動遊びに取り組みながら、支持、ぶら下がり、逆さ姿勢、回転などの基礎的な動きを身に付けている。また、グループで鉄棒・雲梯・固定施設・登り棒をローテーションしながら「忍法（動き）」に挑戦したり、できるようになった動きを工夫（方向・回数・シンクロ）したり、組み合わせたりして楽しむ学習活動を行っている。本学級の児童の実態としては、ふとんほしができない児童が数名おり、鉄棒から手が離れることや逆さの姿勢に恐怖心があると考えられる。また、運動能力の低い児童も数名おり、鉄棒にぶら下がったり、回転したりすることができない児童もいる。

本単元においてこれまでの学習経験をもとにしながら、基礎的・基本的な上がり技、下り技、支持回転技の習得を目指しながら鉄棒運動の特性に触れ、様々な技に取り組む中で 3 つの資質・能力の育成を目指していきたい。

○指導観

本単元は、全 7 時間の単元構成で行う。単元前半では、児童の実態を把握した上で、基本的な支持回転技（だるま回り）、上がり技（補助逆上がり）、下り技（前回り下り）の行い方を知り、自己の課題となる技を見付ける。単元後半は、友達との協働的な学びを通して自己の課題となる技の達成を目指すことで、できなかった技ができるようになる喜びや楽しさに気付いたり、自分のできるようになった技やこれまでに身に付けた技を組み合わせたりする活動に取り組む中で、友達と協力しながら技に取り組む楽しさを味わわせたい。単元を通して、授業の導入時には、簡単なゲームを取り入れた感覚づくりの運動や様々な固定施設を使ったローテーション遊びを行い、鉄棒運動の基礎的な動きや運動感覚の育成および学習への意欲付けを図る。3 年生では、課題解決的な学習方法に戸惑う児童もいることから、学習の行い方も確認しながら、児童の主体的な活動を促していく。なお、単元を通しては、子どもたちの意欲付けとして、技を術として提示して

いく。

本時の授業は6時間目である。指導に当たっては、5時間目の学習を想起させながら基本的な上がり技、下り技、回転技を組み合わせることを通して、できるようになった技を組み合わせる楽しさに気づき、次時の技の発表会につなげていきたい。そのために、まず、本学習で身に付けさせたい支持系の基本的な技（前回り下り、だるま回り、補助逆上がり）の習得を図るために技の練習に取り組む。お互いの動きに着目して、そのよさや改善点等について伝え合いながら活動することで、技の上達を目指す。場の設定については、児童の技の習得状況によって考える。次に、自分のできるようになった技やこれまでに身に付けた技を組み合わせる練習に取り組む。グループは生活班とするが、伝え合う活動が停滞する場合等が生じた場合には調整することも考える。グループでお互いの動きに着目して、技の工夫や技の組み合わせについて伝え合いながら、鉄棒運動を「する・みる・支える・知る」という多様な関わりと関連付けながら楽しく運動する授業を目指すことで本時の目標に迫る。授業の振り返りには、自己評価カードを活用して本時の活動でうまくできたことと次の目標（成果と課題）を児童なりに明確にさせた上で、次時につなげていきたいと考える。

3. 単元の目標

- (1) 鉄棒運動の楽しさや喜びに触れながら、その行い方を知るとともに、支持系の基本的な技ができるようにする。(知識・技能)
- (2) 自己の能力に適した課題を見付け、技ができるようになるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 鉄棒の運動に粘り強く取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、友達の考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりすることができるようにする。(学びに向かう力、人間性等)

4. 本単元における体育の見方・考え方

本単元では、「鉄棒運動の技に挑戦し、その技ができたり高まったりするようになる楽しさや喜びに気付くとともに、これらの運動を行うことが体力の向上につながっていることに着目する。また、鉄棒運動をすることだけでなく、仲間のよい動きを観察したり、応援したり、友達への助言や賞賛をしたり、自己の役割を果たしたり、運動の行い方や自己の課題解決につながる練習方法を知ったりする等、児童一人一人の運動経験の程度等に応じて、鉄棒運動の多様な関わり方と関連付けること」と押さえる。

5. 単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に運動に取り組む態度
① 支持系の基本的な技の習得に向けて、その解決方法を知っている。	① 自分の能力に合った課題を見付けている。	① 鉄棒運動の基本的な技に粘り強く取り組もうとしている。
② 支持系の基本的な技（だるま回り・補助逆上がり・前回り下りなど）ができる。	② 課題の解決のために、見付けた技のポイントや分かったことを言葉で伝えている。	② 鉄棒等の器械・器具の正しい使い方や試技をする前の待ち方、技を観察する時のきまり等を守り、誰とでも仲よく活動しようとしている。
③ 動きや技を繰り返したり、組み合わせたりすることができる。	③ 自己の能力に合った技の組み合わせについて考えている。	③ 補助具等の準備や片付けを行う際に、自分の役割を果たそうとしている。
		④ 互いの動き方や気付いたこと等を伝え合う際に、友達の考えを認めようとしている。
		⑤ 場や器械・器具の安全を確かめて運動しようとしている。

6. 指導と評価の計画（第3学年：7時間扱い）

※別紙参照

7. 本時の展開（6／7時間）

(1) 本時の目標

- ・支持系の基本的な技の行い方を知り、その技ができるようにする。（知識・技能）
 - ・自己の能力に合った技の組み合わせについて考えることができるようにする。
（思考力、判断力、表現力等）
 - ・鉄棒運動に粘り強く取り組み、安全に気を付け、きまりを守って友達と仲よく運動したり、お互いの考えを認め合ったりしながら活動できるようにする。（学びに向かう力、人間性等）
- ※本時では、運動についての〔思考力、判断力、表現力等〕を主として評価する。

(2) 本時での深い学びを実現する工夫

児童が本時のめあてに向かう活動を通して、仲間との協働的な活動のもと試行錯誤しながら運動に没頭している姿を、本時の深い学びに向かう姿と捉える。その実現のために、「学習内容の明確化」「自己のできばえが視覚的に分かる工夫」「他者（友達や教師）からの助言」の3点を重視する。1点目は、本時で扱う技を絞ることで学習内容を明確にし、自分や友達の動きをより深く思考し取り組むことを期待したい。2点目は、スモールステップカードを活用して、自己のできばえ（成果と課題）を視覚的に理解できるようにする。3点目は、これらの活動の中で技や動きのポイントをもとに友達の動きについて伝え合う活動を仕組むことで児童の学びを深めていく。

(3) 本時で児童が働かせる「体育の見方・考え方」に対する教師の手立て

- ・本時において、児童の深い学びの中で、体育の見方・考え方を働かせている姿（言葉や行動等）を紹介して価値付けをする。

(4) 準備物

補助具（まきまきくん、さか上がりくん、マット、逆上がり板、踏切板、台）、掲示物（技の紹介）、スモールステップカード、自己評価カード

(5) 本時の展開

	本時のめあて・学習活動	○教師の働きかけ ☆評価（評価方法） ●体育の見方・考え方への気づきを促す働きかけ
導入	1. ニンニンタイム ・ローテーション遊び ・鉄棒じゃんけん （跳び上がり→つばめ→ふとんほし→つばめ→跳び下り） ・つばめ→だるま振り ・だんごむし→逆上がり	○鉄棒・雲梯・登り棒をローテーションしながら遊び、友達と動きを合わせながら活動させる。 ○鉄棒じゃんけんは、ペアで様々な姿勢や動きを行う。 ○運動の順番が分かるように掲示するとともに、児童の活動の様子を見回りながら動きの助言を行う。 ○本時のめあてや学習の流れを黒板に掲示することで、児童が学習の見通しを持てるようにする。

8. 授業後の話し合い

- ・修行タイム1. 2でだるま回り、逆上がりにつながる運動の提示・取り組む技のバリエーションについて補助具等含めた環境設定を考える必要がある。
- ・鉄棒の苦手な児童が集まって活動している場面が見られたので、課題解決に向かう活動形態として単元前半は同質、単元後半は異質のグループ構成も良いのではないか。
- ・「やってみたい」環境の設営や「もっとやりたい」思いや願いを大切にするために、場の設定（遊具・平均台・マット・補助具）や環境設定（BGM・ICT機器）などを工夫する必要がある。
- ・技の組み合わせについては、子どもの実態（意欲・技能・関わり合い）に即して考える必要がある。
- ・技のポイントの共有化をするためには、モデリングする児童の見取りができる活動構成が大切である。
- ・技能ポイントの共有化と合わせて関わり合い、学び合い、支え合いのよさを共有化できる課題提示と活動構成を考えていかなければならない。
- ・運動な苦手な児童、意欲的でない児童が授業に意欲的に取り組めるように鉄棒遊びの延長として、技の達成に注力しすぎない単元構成を考える必要がある。

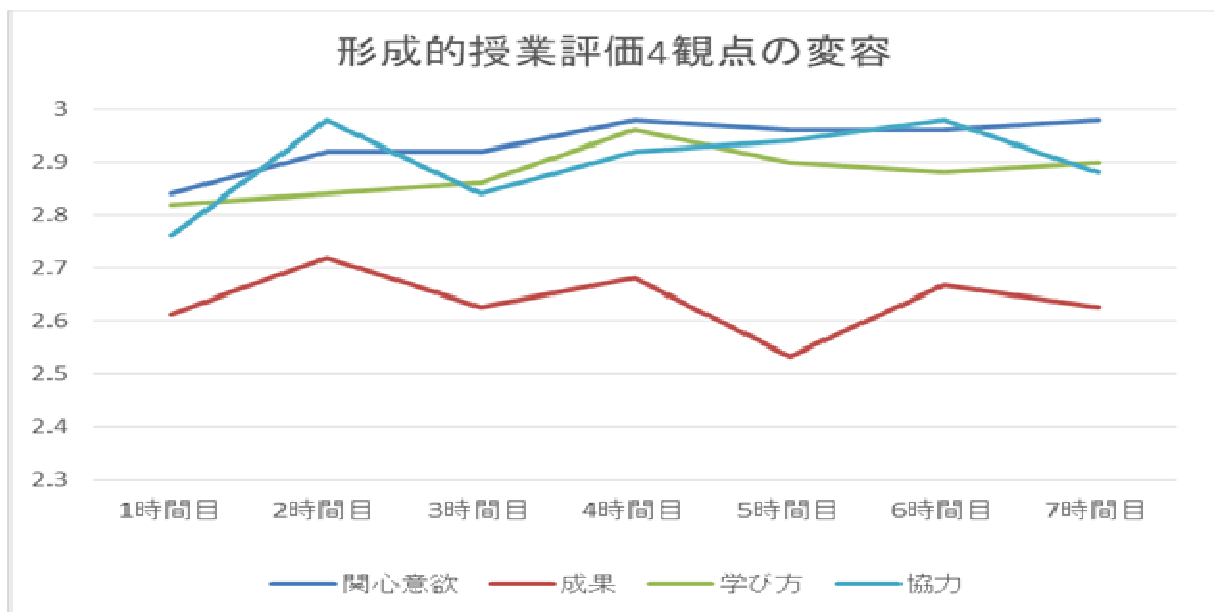
II 研究の考察

（1） 形成的授業評価の結果と考察

毎授業後に取った形成的授業評価から、「関心意欲」「学び方」「協力」項目は、評価の高い結果となった。このような結果となったのは、2つの要因があると考えられる。1つ目は、導入の場面で、子どもたちが「やってみたい!」「おもしろい!」と思うような場の設定や技であったということである。前学年までは、遊びの中で動きを身に付けるという内容であったため、授業の導入では、雲梯や登り棒、鉄棒じゃんけんといった遊びの中で動きを身に付ける活動を取り入れた。また、子どもたちに親しみのある技だけではなく、回転感覚を身に付けさせるためにだるま回り（かかえ込み回り）を身に付けさせたい技と設定したことが関心意欲の変容につながったと考えられる。

2つ目は、技の習得の際に、個人で練習をするのではなく、3人グループで協力しながら技の練習を行ったことである。鉄棒の技を習得するときに、先生だけではなく子どもに補助させることや友達へのアドバイス、声掛けを大切にすることで、学び方や協力の変容につながったと考えられる。

一方、「成果」項目については、他の3項目よりも評価が低い結果となっている。これは前学年までの、遊びの中で鉄棒に必要な下位の動き（アナログン）を身に付けることを中心とした授業から基本的な技の習得を中心とした授業内容になったことが要因として考えられる。運動の得意な児童は意欲的に技に取り組み、練習を重ねるごとに技を習得していたが、運動に苦手意識を持っている児童は、練習を重ねても技の習得が難しく成果を感じられない場面が見られた。運動の苦手な児童や意欲的でない児童へ焦点を当てた授業の組み立てとして、3年生においては鉄棒遊びの延長として技の達成に注力しすぎないことが必要であると考えられる。



(2) 成果と課題

① 知識及び技能

技の習得を中心とした単元構成であったが、授業の導入で鉄棒じゃんけんや雲梯、登り棒など鉄棒遊びの活動を取り入れたことで、支持力・懸垂力・鉄棒の握り方・体の位置感覚・姿勢のコントロールといった運動の基礎感覚を養うことができた。また、子どもたちの意欲や楽しさ、技能の向上につなげることができた。本単元では、だるま回りを中心課題として、技能ポイントの共有化、スモールステップを意識した場の設定、子ども同士関わり合いの3つを意識した授業としたことで子どもたちの関わり合いの中で見合い教え合いが生まれ、技の習得にせまることができたが、取り組む技のバリエーションや補助具等を含めた環境設定、課題解決に向かう活動形態などに課題が残った。



② 思考力・判断力・表現力等

技のポイントを示すことや子ども同士の関わりを意図的に授業に取り入れたことで、子ども同士の教え合いや見合い、学び合い、支え合いなど「かかわり」を深めることにつなげることができた。

本時では、できるようになった技の組み合わせ（上がる・回る・下りる）について考えることを学習課題とした。本単元で提示した技を習得した児童は、仲間と協力しながら技を組み合わせる活動に取り組むことができていたが、技を習得できていない児童は技を習得したいという思いが強く、技の習得に注力していた。児童の発達段階や実態に即して、単元構成や学習課題を考えていかなければならないと感じた。

③ 学びに向かう力、人間性等

単元が進むにつれて、鉄棒運動に恐怖心や苦手意識を持っていた児童も鉄棒運動に意欲的に取り組むことができるようになった。また、児童の中には休み時間などを利用して、技ができるようになるため何度も練習する姿が見られた。子どもたちが「やってみたい」「もっとやりたい」と思うような技の設定や場の設定をすることが子どもたちの意欲につながるということを感じた。そして、授業を重ねるごとに、子ども同士の教え合いや励まし合いの中で「かかわり」を深め、一人ひとりの結びつきや教師との結びつきが変わってきたと感じることができた。

(3) 今後の取組

今回の授業づくりにおいては、だるま回りを中心とした技の習得に重点を置いて行ったが、発達段階と児童実態に即した技（運動）の提示や補助具等を含めた環境設定、課題解決に向けたグルーピングの工夫、運動の苦手な児童や意欲的でない児童に焦点を当てた授業の組み立てを意識した授業づくりを行うことが、中学年3年生として体育【鉄棒運動】の見方・考え方を働かせながら学習に取り組む姿につながるということを学んだ。

今後、授業づくりを行う際には、運動の苦手な児童に焦点を当てた授業の組み立てを意識し、子どもたちみんなが運動やスポーツの持つ楽しさや喜びを感じられるような授業を心掛けていきたい。

